第四回研究会の討論

成蹊大学　安原　茂

第四回研究会の主報告は柿崎京一会員の報告であったが、それに先立ち宿題委員の似田貝香門会員から、ここ数年の共通課題との関連において今年度の共通課題を理解する場合の問題についてコメントがなされ、討論はこの両者の報告・コメントをめぐって行われた。

討論の詳細は録音によって再現整理することを予定していたが、あいにく録音がうまくゆかなかったので、当日の司会の責としてメモ等によりながら討論でとりあげられた論点を紹介することにとどめることとした。

(1)　すでに従来の研究会でもとりあげられたことであるが、化学肥料や農薬の多量施用により、耕地の地力が破壊され、農民自身の健康もそこなわれつつあることが指摘され、またそれと関連して山形県における営農意識調査においても、将来の農業経営に関する農民の不安が、地力の順調な再生産が化学肥料により損われているのではないかという点に向けられているという事例（テレビ報道による）が紹介された。このようなフィジカルな問題を直接とりあげることは困難であるにしても、このような事態を生み出す重要な契機として、たとえば農産物流通機構のメカニズムがあるとすれば、そのメカニズムの解明などが要求されることになる。いずれにせよ、このような意味において、「土地の生命力、人間の生命力の破壊」・「農民生活の破

壊のみならず国民生活全般における生活の破壊的状況」への関心が指摘された（主として中野卓、岩本由輝会員らの発言から）。

(2) 群馬県安中における農民の公害訴訟に、証人として農民生活破壊の論証をおこなった経験から、島崎稔会員から現段階のわが国の小商品生産者としての農民生活再生産における「自給」基盤への新たな注目が指摘された。資本による土地汚染が行われるなかで、資本との対抗において農民の小商品生産者としての性格を考える場合――という限定のもとでの〈自給性〉への注目として理解されるが、そして、このような理解については若干の討論が交されたが、時間の関係上、詳細な展開は行われなかった。なお、ここで問題とされた〈自給性〉が、自給自足的〈生業〉としての農耕における〈自給性〉一般として議論されたものでないことはいうまでも無い（ところで島崎会員の見解は本年度大会の報告として詳細になされるものと思われる）。

(3) 柿崎報告と関連して、とくに討議が重ねられた論点の一つは公害等に対する「住民運動」や「農民斗争」等の性格をいかに理解するか、また、住民運動と農民運動との関連をいかに理解するかなど、生活破壊への集団的対応にかかわる問題であった。小商品生産者層としての農民の階級的規定から、住民一般の生活利害に還元し得ぬ現段階の農民生活再生産へかかわる独自の利害の存在はいうまでもないが、他面には農民層が農民以外の地域住民とともに、その生活利害にかかわる問題を住民運動として展開してゆく事例もあるところから、この問題が提起されたわけだが、生活破壊への抵抗・克服への展望にかかわる論点であった。

(4) 農民の生活破壊について、戦後の農業生産力の発展過程のうちに破壊の契機が存在することを指摘する見解も提示された。地力を破壊しつつ行われてきたごとき労働生産性上昇のあり方自体に対する疑問とも言えよう。それは今日における有機農業見通し論などともかかわる問題であるが、しかし、それが生産力発展一般への否定を含意するものとして、かつての苦汗的労働手段への復帰を肯定するものならば疑問であるとの見解も提示された。

討論のなかで出された主要な論点はほぼ以上のごときものであったが、不十分なメモによったため、極めて不十分なものであることをまぬかれず、不精確な点も少くないことをおそれるが、文責はすべて筆者にあることをおことわりしておく。